

『環境・人口問題と食料生産 —調和の途をアジアから探る—』

渡部忠世、海田能宏編著（農山漁村文化協会）

本書は1998年から2002年まで4年間にわたって続けられた(財)国際高等研究所の課題研究「環境と食糧生産の調和に関する研究—人類生存の視野から」の報告書を一般読者向けに書き直し、現代における農業の問題点と将来のあるべき姿を世に問うた一冊である。

文章表現はきわめて平易ながら、その問いかけは非常に重く、まさに人類生存の根幹にかかわるものといえる。すなわち、「20年後あるいは30年後、—それほど遠くもない近未来の地球の上において、果たして人類はその生存に足る食料をなお生産し続けているだろうか。」という問いである。

確かに1960年代半ばからの穀物生産技術における長足の進歩、特に途上国の「緑の革命」は、人口増加を上回る速さで穀物生産の増大を実現してきた。また、現在は遺伝子操作によるさらなる技術革新に大きな期待がかけられている。将来の世界食料需給の予測も、楽観的なものが多い。

将来の食料事情に関するこうした大方の楽観的な展望に対して、作物学、農村開発論、土壌学、昆虫学、地球環境学など多分野の専門家からなる本書の執筆者の見解は、かなり否定的である。現在約60億の世界人口は2030年には80億を超えると予想されるが、世界の耕地面積はほぼ限界に達し、拡大できる余地はない。そうした中での生産増大は必然的に科学技術の活用・化学物質の多投による単収向上になるが、現実には既に水資源の枯渇や農薬耐性を持った病菌・害虫・雑草の出現、農薬や化学肥料の多投による環境汚染などから、近代農業の負の側面が無視できなくなってきた。こうした近代農業の延長線では、もはや人口増に伴う食料需要の増大に対応で

きないのではないかと、というのが本書の執筆者たちの立場である。

それでは、持続可能で高い土地生産力をもたらすオールタナティブな生産技術とは何であろうか。執筆者たちは、それを「庭院経済」という中国の生態農業やタイの「イネ・魚・家禽・果樹複合経営」など、アジアの伝統的な複合経営的な食料生産形態に求めようとする。副題の「調和の道をアジアから探る」とあるのは、まさにこのゆえである。こうした資源循環的で高い土地生産性を持つアジアの伝統的な農業生産方式を復権しよう、というのが本書の結論的な提言といってよいだろう。

本書の問題意識は人類の未来にとってきわめて切実であり、また本書が指摘する近代農業の問題点や提言には同感する点が多い。ただ、惜しむらくは、本書には農家経営的な分析視点が若干不足していると思われることである。伝統的農法から近代的農法への転換は、確かに環境破壊や物質循環の切断という問題を生んだが、それと引き換えに農家の生活の向上と労働の軽減をもたらしたのはまぎれもない事実である。環境保全が大切だから元の生活に戻れと農家にいっても、それは空虚な掛け声に終わるだけであろう。

近代農業の負の側面が生む社会的コスト（外部不経済）を内部化し、農家の生活を豊かにしながらも持続可能で生産性の高い農業生産システムをいかに構築していくか、それこそ今人類が直面する最重要課題の1つではないだろうか。

そうした問題の根本的解決へ向けた議論の手がかりとして、多くの人に本書を読んでほしい。

(2003年3月 2,350円税込み 228頁)

(須田敏彦)